

苗場山麓 ジオパーク

Vol.
51

振興協議会だより

【発行日】令和3年10月27日
【発行】苗場山麓ジオパーク推進室
【お問い合わせ】025-765-1600



第11回 日本ジオパーク全国大会島根半島・宍道湖中海大会が開催されました

昨年（2020年）、開催を予定していた全国大会は、新型コロナウイルス感染症予防のため1年延期となり、今年は10月3日（日）から5日（火）の日程で、現地参加とオンライン参加のハイブリッド方式で開催するとされていました。しかし、緊急事態宣言地域やまん延防止等重点措置地域が拡大したことや、開催時期に感染状況が改善する見通しが立たない状況から、全国のジオパーク関係者が参加する大会プログラムは全てオンラインでの開催へ変更となりました。

当ジオパークでは、会長をはじめ、認定ガイドの方、観光部局の職員や事務局メンバー合わせて総勢8名で参加させていただきました。開催初日には、市長村長セッション「コロナ時代のジオパーク活動による地方創生と持続可能な社会の構築」において、当ジオパーク振興協議会会長である桑原町長に、2つのテーマについて議論を交わしていただきました。2日目は午前、開会式、特別講演、基調講演や基調提起がYouTubeでライブ配信されました。午後からはビデオ会議システムZoomを使用し、ガイドの会代表である小島隆夫さんより、ポスターセッションのテーマの1つ、担い手育成（ガイド養成）の活動事例を挙げて発表していただいたり、4つの分科会「①保全・保護、②担い手育成（学校教育）、③社会貢献（防災）、④ネットワークの意義・活用（地域内のネットワークづくり）」にそれぞれ参加し、グループトーク後に口頭発表を聞き、意見交換などを行いました。また、ガイド講習会「インタープリテーション講座」も開かれ、認定ガイドの坪内恵理子さんと事務局1名で2日間にわたり受講しました。3日目は、午前5つの分科会「①保全・保護、②担い手育成（地域住民）、③社会貢献（ユニバーサルデザイン）、④ネットワークの意義・活用（ジオパーク同士のネットワークづくり）、⑤地域振興（ツーリズム）」が行われ、午後は、9名のパネリストによる分科会報告をふまえたパネルディスカッションにて総括となりました。

今大会のテーマが、「今、なぜジオパーク？」ということで、様々な視点からジオパークの価値を身近に感じ、持続可能な地域づくりに繋がる活動をいかに展開していくのか改めて考える機会となりました。来年（2022年）の石川県白山手取川ジオパークで開催される全国大会に向けて、今後も各地域のジオパークとの連携を図り、ジオパーク活動をより深めていきたいです。



大地のたからもの～苗場山麓ジオパーク特産商品ご紹介⑤～



【ジオサラダ】味処 か久栄 〒949-8201新潟県津南町大割野 ☎025-765-3776
営業時間11:30～14:00／17:30～23:00 定休日:毎週月曜日(日曜日は夜営業のみ)

ジオストーリー

標高差が生む寒暖差。豊富な軟水の湧水。長い年月をかけて降り積もった火山灰土。苗場山麓はおいしい高原野菜の産地です。地元の旬の野菜で、おいしい農産物を生み出す河岸段丘や柱状節理の大地を表現したごちそうサラダをどうぞ。

※苗場山麓ジオパーク振興協議会・商品開発部会事務局では、新規商品の申請について、随時ご相談を受け付けております。

お問い合わせ 津南町役場観光地域づくり課 電話025-765-5454



〈再審査に向けてひた走る室長日誌1〉 ジオ活動を振り返れば

2018年に行われた1回目の再審査は、観光的側面であるマーケティングとプロモーションに対して改善指示を頂いた。にも関わらず「グリーンカード」を頂き、令和4年に向かって歩みを進めてきた。現在、1年後に2回目の再審査を受ける緊張感と心もとない不安が、心の片隅を交差する毎日である。

初心に戻り、活動綴りから自らが考え、スタッフと協議してきたことを振り返り、次なる糧としたい。

まだ、ジオパークに登録されていない2011年に潜在資源を「地域財」と捉える考え方を示した。その要素に「大地」「生態環境」「歴史」「遺跡」「ゆかりの人々」があり、これらを有機的に結び付けて、五感体験を展開する必要性を提言した。

2012年に入ると「町まるごと博物館構想」を踏まえた「津南レガシー計画」を立案し、その計画を実践的に議論することで将来的に国が示す「歴史文化基本構想」化する段階的活動の可能性を探った。その基盤に「大地と環境、そして歴史・文化」を階層的に捉える必要性を説いた。

この発言を受け、「仮称“苗場山麓ジオパーク”について」のレポートがまとめられた。レポートの冒頭には「苗場山周辺は、上信越高原国立公園の一部であり、その山麓一帯は世界に類を見ない“町まるごと博物館”（フィールドミュージアム）」であると説き、「このような環境で五感を通して、雄大なジオと複雑多様なエコ、そして、そこで育まれたカルチャーの智恵を学ぶ大切さを伝えるのが「苗場山麓ジオパーク」ですと説明し、「この“苗場山麓ジオパーク”として括られた『大地の遺産』をフィールドに多様なツーリズムを多面的に構成し推進することで、地域の経済を持続的な形で活性化すると考えられています。」とまとめた。

そのジオパークの多面性として「教育・観光・防災・農業・電気エネルギー」を挙げ、「保全活用の意義」を「行政哲学」が支える必要性を強調した。そして「苗場山麓物語」を描き、その「歴史環境の活用に伴う換金システムの構築」を目指す地平に「資源から資産へ」の視点があると指摘した。

この段階で「地域の財に光を当てるー苗場山麓ジオパークの保護と活用ー」なるシンポジウム開催の必要性を説き、「大地の恵み五感体験ツアー（春・夏・秋）」や「中津川の魚を考えるツアー」、「苗場山麓フィールドミュージアム“マイスター取得制度”」、「ジオパークオリエンテーションウォーキング」「苗場山麓ジオマラソン」「ジオラフティグツアー」「苗場山麓ゴミ0運動」「苗場山麓トリビア」「苗場山麓ビューポイント調査」「苗場山麓植物図鑑の編集・刊行」などを思考した。そして、「大地・苗場山・火焰型土器・自然との共生」をテーマとしたロゴ作成を模索していた。さらに、「苗場山麓ジオパーク交流センターの設立」を謳い、「苗場山麓の歴史と自然環境」「雪国縄文文化の魅力と智恵」「中津川溪谷に残された民俗」をテーマにしたガイダンス展示機能、「苗場山麓学術図書室」や「苗場山麓調査研究支援棟」などの学術研究機能、そして、食堂として「雪国おふくろの味」や「観光協会事務局」との併合を夢見ていた。そして、「津南郷歴史自然環境活用振興推進委員会の設置・運営を経て、2014年3月にジオパーク登録の申請を行うと意気込んでいた。

ジオパーク登録には6年前後掛かるといわれていたが、我ら“苗場山麓ジオパーク”は2011年の潜在資源の認識から4年足らずで駆け上がり、2014年12月に日本ジオパークネットワークの仲間入りを果たしたのであった。

その後、再審査年の2018年になると「地域資源保全活用論」なるレポートを書くことになる。その骨子は、「雪国観光圏に位置付けされる“苗場山麓ジオパーク”」であり、そこに包蔵される資源の「高いポテンシャル」を評価し、「環境学習+雪国文化学習+防災学習」を展開する「企業親子体験・学校体験旅行」にターゲットを絞ることを提言した。その背景に「上信越高原国立公園（環境省）」「佐武流山周辺森林生態保護地域（林野庁）」「日本遺産 なん



生物だけでなく生育環境やその保全の大切さを学ぶ



第二の白神山地といわれる佐武流山周辺(左奥が苗場山)



雪と森林は自然のダム



地形の高低差を利用した水力発電は
有力な再生可能エネルギー

だこれは！信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化（文化庁）」なる第3者機関が認めたライセンスがたなびくことを再認識した。これら地域資源を保全管理・運用することが持続可能な山村運営に必要なと言説した。すなわち、「地域にあるモノを磨き、輝かせ、誇りに思う」ことの素晴らしさに「手と手を携えた新しい地域造り」があると結論付けた。

2019年に入ると「地域の未来を見つめる人々」なるレポートを書き、「苗場山麓ジオパークの本質」を議論した。そこでは「自然環境との向き合い方」を「SDGs」として考え、さらには「オーバークースにおける地域資源の劣化を踏まえた静かな活動」の大切さを訴えた。さらに「雪国観光圏における苗場山麓の羅針盤」では、「世界遺産“日本食”」の源にある「水とまんま、酒」に注目し、北緯37度に位置する苗場山麓は「歴史と日本食の里」であることを宣言した。苗場山麓は「水」「米」「野菜」「山菜」「酒」「溪流魚」「肉」などの食材自給率100%の土地柄であることを再認識した。この素晴らしい「地域財を認め、持続可能な開発」を「未来の人々のために今何をどのように残し整備すること」が大切であると力説した。さらに、十日町タイムス2020年正月号に「地域資源の活用と保全ー苗場山麓ジオパークからの眺望ー」を投稿した。そこでも「“ジオ+エコ+カルチャー”」で構成される地域資源をサイトとして登録し、保全管理することは「持続可能な開発」の入り口であり、その「地域資源の保全管理と安全運用の定着」の背景に「行政哲学」があることを指摘した。この素晴らしい苗場山麓を「歩き、触れて、食べて、飲んで、笑って、温泉に浸かる、そんな知的好奇心を満足させる観光地整備を文化財保護部局と観光部局との連携で推進することが望まれる」と締めた。

2020年に入ると「苗場山麓ジオパーク推進のための安定財源の提言」をまとめ、「持続可能な開発への可能性ー苗場山麓ジオパークからの視点ー」では、「自然環境と歴史文化を分かりやすく来訪者に伝える」ためのインタープリターの必要性に触れ、科学的エビデンスを「大衆に理解される平易な言葉に翻訳すること」そのものがユニバーサルデザインの一項目であることを説明した。

2021年10月、これまでの議論の積み上げを大切にして苗場山麓ジオパークにおける資源保全型ツーリズムにおける学習カリキュラムの整理と再構築に着手したいものである。



ガイドからインタープリターへ



突撃しよう！となりのジオ便り～アポイ岳ジオパークからこんにちは～(アポイ岳ジオパーク 加藤 聡美)

北海道の中央付近に南北150kmにわたり連なる日高山脈。その山脈の南端に位置するアポイ岳と太平洋に抱かれた町が様似町です。

さて、かつて北海道の右半分と左半分が別のプレートに分かれていて、間には海が広がっていたことをご存じでしょうか。別々のプレート上にあった大陸が、プレートの移動によって接近、衝突、そして合体してできたのが今の北海道であり、衝突した2枚のプレートの境界がめくれあがってできたのが日高山脈とアポイ岳。アポイ岳は、プレート下部を構成しているマントルが押し上げられてできた山で、山全体がかんらん岩でできています。



ヒダカソウ

固有な植物が多く見られるアポイ岳の高山植物も、大地のダイナミックな動きによりもたらされました。アポイ岳は標高が810mしかない山ですが、約80種の高山植物が生育し、そのうち約20種がアポイ岳に固有な植物であることは、かんらん岩の影響が大きいのです。かんらん岩の独特な化学成分や貧栄養、乾燥といった土壌条件が、高木類の定着や成長を妨げ、疑似的な高山植生がつくられています。アポイ岳で見られる高山植物の多様性は驚異的で、これほどひとつの山に固有な植物が多いのは世界的に見ても稀です。かんらん岩という特殊な岩石と山岳の形成

がなければ、これらの種の誕生はなかったといえるのでしょう。

太平洋に面した様似町の主産業は漁業ですが、サケと並ぶ主力が昆布。ここで採れるのは世界でも胆振～日高にしか生息していない昆布、ミツイシコンブ（商品名：日高昆布）。だし汁、昆布巻き、佃煮など日本料理に欠かせない昆布。ダシに良し、食べて良しというその用途の広さが最大の特長です。昆布で面白いのは、産地の浜自体に優劣をつけて品質の差を表していることです。昆布は値段をつける指標として、浜にランクがつけられており、特上浜、上浜、中浜及び並浜と分けられています。昆布は、生育する浜の地形や、豊かな森から流れ込む川などの自然環境によって明確に品質に差が出るといわれています。育つ場所によって同じ種類の昆布でも、昆布の幅、厚み、長さ、黒光りした色つや、風味など、形状や味が微妙に違うそうです。様似町の浜は、すべて上浜です。これから科学的な研究が進むことが望まれますが、鉄分やマグネシウムなどのミネラルが豊富なかんらん岩の存在が、昆布の質に影響しているのかもしれません。



昆布干しの様子

認定ジオガイド
が伝える

ここが好きだよジオパーク

認定ジオガイドがおすすめの場所、
もの、ことなどを紹介していきます。

越智 勇氣さん



好きな風景、好きなこと（ガイド No.41 越智 勇氣さん）

①初夏の晴れた日に、さかえ倶楽部スキー場の上の方で食べるピクニックランチ。

悩みをすべて吹き飛ばしてしまうかのような青い空。清々しい風。千曲川と段丘のコントラスト。最高です。



②夏の暑い日。凍えてしまうほど冷たい川に入る。

驚くほど冷たいエメラルドグリーンの川。深い雪によって作られるのかな。河原のいろいろな色の石を見るのもまた楽しいです。長瀬に住んでいるので栄村東部と津南町上郷の境の志久見川も気軽に良いですが、やっぱり秋山の中津川ですね。（写真は雑魚川です。特に上流に入るときは靴底を滅菌消毒して、他所の種や藻を持ち込まないように川にお入りくださいね。）



③初春の鳥甲牧場。

清々しいことこの上ない一面の雪原。雪を踏みしめながら白い息を吐く。雪の上でコーヒーを淹れるのもまた良し。通行止めが解除になった瞬間がベストです。